

ゴンザの出身地に関する一考察

駒 走 昭 二

1. はじめに

1729年、ロシアに漂着した少年ゴンザの出身地が薩摩であることには疑いの余地がない。クラシェニンニコフの『Описание Земли Камчатки сочиненное Степаном Крашенинниковым Академии Наук профессором в Санктпетербурге при Императорской Академии Наук, 1755.году.Том второй.』(以下『カムチャトカ地誌¹⁾』)に、ゴンザの乗った船が、「из города сацмы」すなわち「薩摩から」出航したと明記されているからである。また、彼がロシアで残した書物に書かれてある言葉の特徴から判断しても、そのことは間違いない。

しかし、さらに踏み込んで薩摩のどこなのかということになると、それを明らかにできる資料がなく、決定的な出身地の解明には至っていない。廃仏毀釈が徹底的に行われた薩摩においては、過去帳など、庶民の個人情報を記した歴史資料がほとんど存在しないのである。その点、同じく18世紀のロシア資料『レクシコン』の作成に携わった漂流民サノスケの出身地が、過去帳や墓碑から南部藩の佐井村であると特定できたのとは異なる²⁾。

これまでも間接的な資料を分析し、さまざまな出身地が候補として挙

げられてきたが、定説を得るには至っていないのが現状である。

本稿では、ゴンザの著作物や、当時の情勢などをもとに、一つの推論を展開したいと思う。もちろん、決定的な証拠の提示は不可能であるが、多少なりとも出身地の絞り込みに寄与できれば幸いである。

2. 先行研究

ゴンザの出身地に関して、薩摩内部の具体的な地名が挙げたのは、ゴンザ資料研究の嚆矢となった村山七郎（1965）の中での「鹿児島市」が最初であろう。ただ、その根拠は明らかにされておらず、その後の村山七郎（1985）においては、「ゴンザは薩摩の国 город Сацма の出身であるが、鹿児島出身か又は他の町の出身かは、その薩摩方言の音声面、形態面の特徴や特殊な語彙を調査すれば決定されるであろう」と、明言が避けられている。

続いて、田尻英三（1987）は、ゴンザの言葉に見られる言語学的特徴のいくつかに注目し、出身地を特定しようとした。そこでは、まず「テ・デがチェ・ヂェに転化している」「一部の語においては、語中尾のタ・ダ行が有声化する」「セ・ゼにあたる音節は、シェ・ジェとしてあらわれる」などの特徴が採り上げられ、串木野市（現 いちき串木野市）周辺が候補に挙げられた。しかし、そうすると、その他の「形容詞はカ語尾・イ語尾併用」「語末にイ・ウ母音をもつ音節は無声化はしているが、現在の薩隅方言の特徴とされる「促音化」は見られない」「二重母音から変化したiがみられる」という特徴の説明ができないことから、結局は、「直接どの地域の出身であると特定することは出来ないと考えている」という結論に至っている。

その後、ゴンザファンクラブが中心となって、鹿児島県ほぼ全域の語

彙調査が行われ³⁾、出身地の絞り込み作業が行われたようであるが、調査の困難さに加え、270年以上もの時代の隔たりにより、その特定はなかなか難しい状況のようである。

3. 特徴的な語から

ゴンザが残した各資料は、18世紀前期薩隅方言を知る上で、非常に有益である。ロシア語の文章、単語に対して、ゴンザが自分の話し言葉を用いて日本語訳を行っているからである。しかも、表音文字であるロシア文字を用いて日本語が記されているため、仮名資料よりも、細かな形態の復元が可能である。そこで、まずは、彼の著作物に見られる特徴的な語に注目し、それをもとに、彼の出身地を推定してみたいと思う。

現代薩隅方言の資料としては、『日本言語地図』を用いる。そこには、鹿児島県内の91地点での調査結果が記録されており、近世期における薩摩国に限定しても33の地点での調査結果が記されている。現代薩隅方言の資料とはいえ、第1集の初版が1966年と、今から40年以上前のものであるが、当然、現在よりも古い薩隅方言を留めているはずであり、18世紀前期薩隅方言の残存状況を探る上では、かえって都合がよい。ただ、注意しなければならないのは、それでも、『日本言語地図』に記されている言葉と、ゴンザが薩摩を離れた時点で話していた言葉とは約240年もの隔たりがあるということである。前述したように、時代の推移を考慮に入れなければならない、ゴンザの言葉が現在、どの地域に残っているかという分布を見るだけでは、判断を誤りかねない。そこには、各語形の分布を通時的にとらえる方言地理学的な考察が必要であると考ええる。

3. 1. 「кибисъ (キビス)」について

まずは、ゴンザ資料の中で、ロシア語「лодыжка (くるぶし)」の対訳として用いられている「кибисъ (キビス)」を検討してみる⁴⁾。この語は『日本言語地図』の第128図に記載されているが、それを便宜上、簡略化し、西日本のみを記したものを「地図1」として示す(但し、本稿と関連のない語形に関しては省略してある)。これを見ると、「KIBISU」は、宮崎県の一部と鹿児島県のいちき串木野地区にのみ見られることがわかる⁵⁾。ここでは、やはり薩摩国に属していた、いちき串木野での存在が注目される。他の語形については、以前の薩摩国(現在の鹿児島県の西半分)に限定して観察して見ると、北部に「ASINOKOBU」「MOMOBUSI」「KOBUSI」等がわずかに見られ、中南部では、圧倒的に「MOMOZANE」が分布している。この点に関して、『日本言語地図』付録の『日本言語地図解説—各図の説明—』(以下『解説』)は次のように説く。

MOMOBUSIが九州のみに発見されるのに対して、MOMOZANEは2か所の離れた地域を持っている。MOMOZANEとたとえばTORIKOBUSIが混交してMOMOBUSIが生じたと考えことはできないであろうか。もしそうだとすれば、MOMOZANEはTORIKOBUSIなどが西進してくる前の、西日本における古い表現かもしれないと言えることになる。

ここでは、「MOMOZANE」が、西日本における古い表現であることが述べられているが、その根拠は、次の2点である。

- ①「MOMOZANE」が、九州以外の離れた地点(四国の南東部)にも分布していること。
- ②九州において、「MOMOZANE」のすぐ北部に隣接して分布する「MOMOBUSI」が、その形態上、「MOMOZANE」と「TO-

RIKOBUSI」等の混交によって生じたと考えられること。

「MOMOZANE」という語形を、このようにとらえると、薩摩国において、「くるぶし」を意味する語形としては、もともと、「MOMOZANE」が全体を覆っていたところへ、「KIBISU」「KOBUSI」「ASINOKOBU」「MOMOBUSI」等が順に北から伝播、もしくは発生したと見るべきであろう。そして、そのように「くるぶし」の方言形の推移を考えたとき、18世紀前期に「KIBISU」が分布していたのは、少なくとも、現在その語形を用いているいちき串木野地区よりも北であるということが言えるのではなかろうか。

地図1「くるぶし（蹠）」



3. 2. 「бобра (ボブラ)」から

次に、「тыква (かぼちゃ)」の対訳「бобра (ボブラ)」について。これは、『日本言語地図』の第180図に記載されているが、これを簡略化して示したものが[地図2]である。一見して、「BOBURA」は、九州の北西部に広く分布していることがわかる。また、鹿児島県内では、北西部の大口、薩摩川内、いちき串木野周辺と、南西部の枕崎地区に分布しており、その他の地域では、「KABOCYA」となっている。『解説』では、鹿児島県の「KABOCYA」類と「BOBURA」類の分布について、2つの解釈を示している。一つは、「KABOCYA」類と「BOBURA」類の併用地域での被調査者の注記等から判断して、「BOBURA」の方が古く、この表現が一時代前は県全体を覆っていたであろうという解釈。もう一つは、各地に「BOBURA」類が広まった後に、鹿児島ではこの作物を栽培ないし食するようになり、その時には、当初から「KABOCYA」類を採用した、すなわち鹿児島の中心部において「BOBURA」を用いていた時代はなかったという解釈である。

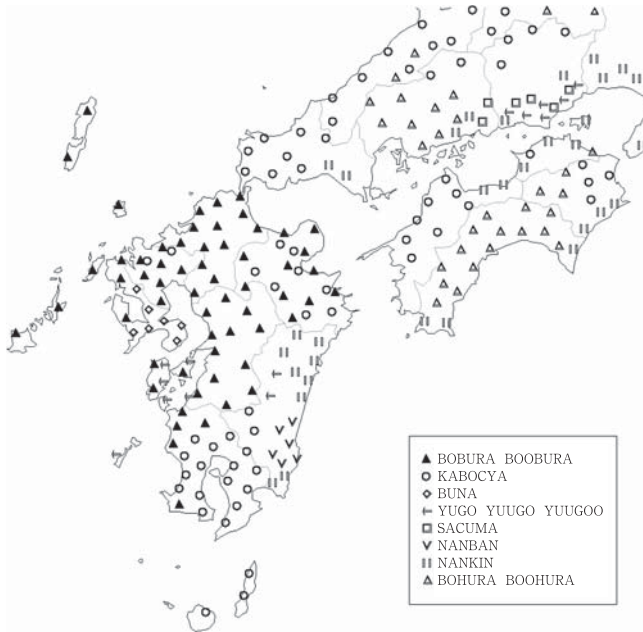
ここで注意しなければならない点がある。言葉の伝播と物の伝播の関連である。「かぼちゃ」という作物自体は、どのように広まっていったのであろうか。前述の「くるぶし」とは異なり、「かぼちゃ」はその存在自体が、日本においては比較的新しい。『草木六部耕種法 卷十七』には、次のようにある。

南瓜は最初東印度亜・東坡塞國に生じたる物也、故に又「かんぼちや」とも名く、此物の日本に渡たるは、西瓜の渡りたるより百程以前、天文年西洋人始めて豊後の國に来舶し、國主大友宗麟に種々の物を獻じ、大友の許しを得て其後毎年来り、(以下略)

要するに、「かぼちゃ」は、天文(1532~1555)年間に、西洋人(おそらくポルトガル人)によって、まず豊後国にもたらされたことがわか

る。そして、よく知られているように、その原産地が、東坡塞國すなわちカンボジアであると考えられたために、「ぼうぶら」とは別に、「かんぼちや」という別名がついたということである⁶⁾。

地図2「かぼちゃ（南瓜）」



しかし、一方で次のような記録も残されている。『大和本草 卷之五』の記述である。

^{ぼうぶら}南瓜 本邦に来る事、慶長元和中なるべし。西瓜より早く来る。

京都には延寶天和年中に初て種をうゝ。其前は無之。(以下略)

ここでは、慶長（1596～1615）元和（1615～1624）年間に日本に伝来して来たとなっている。ただ、その伝来地については不明である。この点、清水桂一（1980）の記述が興味深い。

カボチャ【南瓜】長崎では天正（一五七三～九二）ころからボウ

ブラ（カボチャの外国名）を作り始めた。その種は、もと回紇（ウイグル）から渡ってきた。薩摩には元和年間（一六一五～二四）にカンボジア（東埔寨）からボウブラというウリが渡来し、寛永年間（一六二四～四四）に世に広まった。

残念ながら典拠が示されていないが、『大和本草 卷之五』の記述との一致から、元和年間に南瓜が伝来してきた地は薩摩であったようである。

再び、言葉の伝播に戻ろう。筆者は、上記のような作物自体の伝播を踏まえて、次のように推測する。この作物は、まず西洋人によって、大分（豊後国）あるいは長崎に「BOBURA」（『解説』によると、ポーブラという語は、ポルトガル語の abobura に由来するということである）として伝わり、続いて鹿児島にカンボジアからもたらされ、その作物を原産地名から、「KABOCYA」と呼び始め、さらにその呼び方が物とともに拡張し始めたのではなかろうか。つまり、大分あるいは長崎を発信源として九州北部から、作物と同時に「BOBURA」という語が拡張していったが、南端の鹿児島まで席卷する前に、鹿児島にこの作物が伝来し⁷⁾、そこを発信源とした「KABOCYA」という語が縄張りを拡張し始め、鹿児島北西部で衝突したという解釈である。鹿児島を発信源とする「KABOCYA」は、その後、「BOBURA」の縄張りである九州北部を飛び越えて、或いは、「BOBURA」と併用されながら、全国へと広まり、既に「BOBURA」が伝わっていた地域をも浸食し始めたのではなかろうか。岡山南部に分布する「SACUMA」類や「YUUGO」類は、その傍証となるかもしれない。沢木幹栄（1979）は、これらの語形について「この二つの語形はサツマユーガオから生じた片割れ同士であろうと推論できる」としている。物の名前が、伝播してきた土地の名前から付けられることはよくある。岡山南部での語形は、「かぼちゃ」という作物の薩摩からの伝播を意味するのであろう。

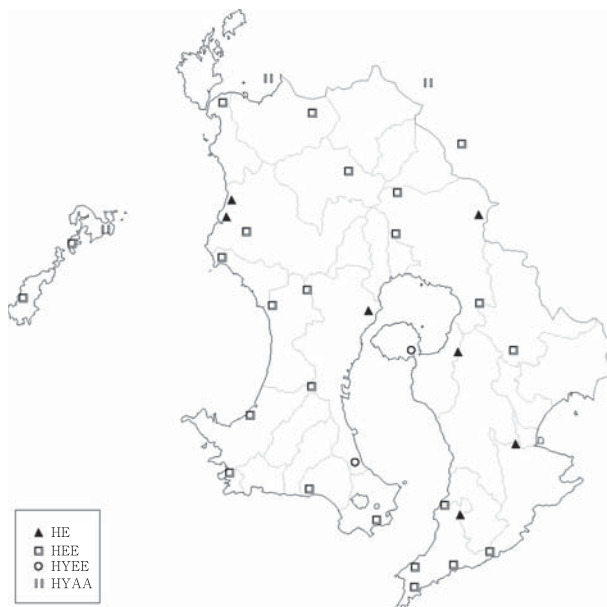
上記のような推測が許されるならば、『解説』の二つ目の解釈と同様に、現在「KABOCYA」類が分布している地域に、「BOBURA」類が分布していた時代はなかったことになる。ということは、18世紀前期に「BOBURA」が分布していたのは、現在の分布と同様に、薩摩国の北西部に位置する、大口、薩摩川内、いちき串木野周辺と、南西部に位置する枕崎周辺ということになる。

3.3. 「 ϕe (フェ)」から

続いて、「 $\mu x a$ (蠅)」の対訳「 ϕe (フェ)」について。『日本言語地図』の第232図である。簡略化し、鹿児島のみを記したものを「地図3」として示す。この地図の解釈には、やや注意を要する。というのは、一見、北西部と鹿児島湾岸を除く、鹿児島県のほぼ全域に「HEE [he:]」が分布しており、あたかもゴンザ資料中の「 ϕe (フェ)」が語形を少し変えながらも、広く残存しているかのように見えるからである。しかし、長音は短く発音されるという現代薩隅方言の特徴から判断して、18世紀において短音だった語が、現代では長音として発音されるということは、やや考えにくい。現在、「HEE [he:]」と伸ばして発音する地域では、18世紀においても、同様に「HEE [he:]」と伸ばして発音していたのではなからうか。宮崎県の一部にはゴンザ資料の「 ϕe (フェ)」と全く同形と思われる「HWE」が分布しているが、ここは旧薩摩国に含まれないので、無視して問題あるまい。ここでは、短音という点から、「HE」に注目したい。子音が両唇音でないという点で、ゴンザ資料の場合とは異なるが、周知の通り、日本語音韻史上、ハ行子音の〔 Φ 〕音が、〔h〕音へ変化することは、十分にあり得ることである⁸⁾。

これらから、18世紀前期に「 ϕe (フェ)」が分布していたのは、『日本言語地図』で「HEE [he:]」が分布している地域ではなく、「HE」

地図3「はえ（蠅）」



が分布している地域であった可能性の方が高いように思われる。そこで、この「HE」が分布している地域を旧薩摩国の中で探してみると、薩摩川内市周辺と鹿児島市ということになる。

ここまで、ゴンザ資料の中から三つの語を選出し、その語形と『日本言語地図』の分布を照合しながら検討してきた。他の単語についても詳しい考察が必要であるが、標準語形と大きく異なる語で、現代でも残っている、あるいは『日本言語地図』に記載されているもの、そして、旧薩摩国内で多様性のあるものとなると、それらの条件を満たす語がなかなか存在しない。ここで挙げた3例は、ゴンザの方言を考える際の手がかりとなる貴重な語と言えよう。そして、ここまでの検討に基づいて、一応の結論を出すならば、ゴンザの方言は、現在の薩摩川内市周辺の言

葉であった可能性が最も高いということになるのか。

4. 18世紀薩摩の情勢から

次に、当時の薩摩の情勢から、ゴンザの出身地を探ってみようと思う。

アンドレイ・ボグダーノフによる『Архив Академии Наук СССР, разряд II, опись 1 No. 206, листы 11-12. Краткая ведомость о бывших здесь в Санкт-Петербурге японского государства двух чело­веках которые крещены в христианскую веру. Имена им по крещении первому Косьма, второму Дамиан.』(以下『簡単な報告』)によると⁹⁾、ゴンザたちは、「Мацдере Осимано-ками」すなわち松平大隅守の命を受け、大坂に住む領主奉公人たちに生活用の米などを届けるために出航したということである。つまり、彼らの航海の目的は私的な漁などではなく、藩命を受けた公の仕事としての貨物輸送だったわけである。そこで、当時の薩摩における海上交通について見てみることにする¹⁰⁾。

『旧記雑録追録 卷三十五』に、参勤交替に関する次のような文書が収載されている。

覚

西目道程

- 一 薩州鹿兒嶋城下乗船場より同國之内船場京泊迄、海上道程五拾七里、
- 一 京泊より肥前國平戸迄、海上七拾一里餘、
- 一 平戸より豊前國小倉迄、海上五拾五里、
- 一 小倉より大坂迄、海上百三十五里、
- 一 大坂より御當地迄、陸路百三十里、

海陸道程合

四百四拾八里餘

東目道程

- 一 薩州京泊より日州細嶋迄、海上百貳拾四里、
- 一 細嶋より豊州鶴崎迄、海上五拾二里、
- 一 鶴崎より大坂迄、海上百廿八里、
- 一 大坂より御當地迄、陸路百三拾里、

海陸道程合

四百三拾四里

これは、寶永2年(1705)正月の文書なので、ゴンザたちの出航よりも24年ほど前のものであるが、当時の薩摩藩が利用した交通手段を知るには十分であろう。この記述から、城下鹿児島から大坂・江戸へ向かう手段としては二つの道程があったことがわかる。その二つの道程のうちでは、そこに記されている数字が示すように東目道程の方がやや距離が短いのであるが、この文書の直後には、東目の途中にある野間崎、佐多之御崎、都井の御崎が浪の荒い難所であったことも記されている。つまり、距離は長いが安全な西目道程(但し、こちらの道程も秋から春にかけては西北からの強い風のために不自由であったと、直前の文書に記されている)と、距離は短いが危険の伴う東目道程という選択肢であったのではなからうか。

さて、ゴンザたちが利用した道程は、どのようなものであったのであろうか。参勤交替の行程でないとはいえ、藩の御用で大坂に向かうのであるから、上記の道程と同様に考えてよいのではなからうか。では、上記二つの道程のうち、どちらの可能性が高いのであろうか。ここで思い出されるのが、前出の『カムチャトカ地誌』に記されているゴンザたちの船の名前「фаяикъмар(ファヤイキマル)」である¹¹⁾。村山七郎

(1965) は、これを「速・行・丸」であると推定しているが、その蓋然性は高いと思われる。前出の『簡単な報告』では、ゴンザたちの乗っていた船の名は「вакашивамар (ワカシワマル)」となっているので、おそらく、こちらが正式な船名 (村山の推定によれば若潮丸) であり、「фаяикъмар (ファヤイキマル)」の方は、通称なのであろう。漂流の原因が、「速行丸」すなわち最短距離の航路を行く船にあったと考えるゴンザの無念が、ボグダーノフの質問に対してこのような回答となって現れたのではなからうか。そのように考えると東目道程を辿ったのではないかと思われるが、やはり想像の域を出ない。ただ、それでも、上記の文書から、次のことは明らかに言える。それは、西目道程、東目道程のいずれを取るにせよ、薩摩国を出るときには、必ず京泊を起点にしているということである。京泊は、現在の薩摩川内市にあり、古くから商港としてにぎわった港である。物資の運搬に重要な役割を果たした川内川の河口にある。中国との貿易港としても栄え、同じ河口の対岸には、藩の軍港として栄えた久見崎もあった。そして、川内川をここよりやや上ったところには、参勤交代の時の宿泊地となっていた御仮屋という町があり、そこには、上納米などの物資を保管する蔵が建ち並んでいた¹²⁾。状況証拠だけとはいえ、藩の命を受けて、多くの荷物を積み、当然それなりの積載能力を備え、大坂へ向かったゴンザの船が、この川内川河口の町から出航した可能性は高いと言えるのではなからうか。そして、『カムチャカ地誌』によれば、ゴンザは、当時 11 歳という年少であったにも関わらず、船の舵手であった父親に連れられて乗船している。住居も出港地の近くにあったと考えるのが自然であろう。

因みに、文化 9 年 (1812) には、藩米を運ぶために川内川河口の船間島から江戸に向かっていた永寿丸が、途中で遭難し、ロシアに漂着したとの記録がある¹³⁾。状況が似ているだけに興味深い。

5. 『カムチャトカ地誌』再読

以上のような根拠により、ゴンザの出港地ならびに出身地は、現在の薩摩川内市辺りではなかったかと推察するが、そのように考えると、『カムチャトカ地誌』の記述も、今までとは異なる見方ができる。そこには、冒頭に示したように、ゴンザが、「из города Сацмы (薩摩から)」、「в город Азаку (大坂へ)」向かったとある。これまで、この「города Сацмы」は、薩摩国のことを指すものだと考えられてきた。しかし、そうだとすると、目的地の方が摂津の国ではなく、大坂という都市の名前が挙げられていることと釣り合いがとれない。大坂の知名度を考えれば当然のことなのかもしれないが、再考の余地はありそうである。もっとも、村山(1965)にある『カムチャトカ地誌』の日本語訳では、この部分が「薩摩町」と訳されているのであるが、その後の研究、紹介の場では、この「町」は除かれて「薩摩」として定着している。村山が述べる¹⁴⁾ように、この「город」というロシア語を、ゴンザが、各資料において、「кунь」(クニ)と訳しているのも事実であるが、『カムチャトカ地誌』の当該箇所はゴンザではなく、ロシア人のアンドレイ・ボグダーノフが記したものである。ゴンザが、この「город」というロシア語の意味をどのように認識していたのかということは、直接的には関係がない。「город」というロシア語には、国という意味はなく、町、都会という意味しかない。それでは、近世期において、「薩摩」という「国」ではなく、「町」が存在したのかということ、現在でも存在する「薩摩郡」という地方がある。この薩摩郡の地名は、古くから存在し、平安初期の『日本後記』巻十二(桓武天皇 延暦廿三年)の記録に早くも登場する。

庚子。太宰府言。大隅國桑原郡蒲生驛與薩摩國薩摩郡田尻驛。相去遙遠。(以下略)

近世においても、「薩摩十四郡」の中の一つとして存在していることが、『日本海山潮陸圖¹⁵⁾』などで確認できる。そして、この薩摩郡こそ、まさに今の薩摩川内市界限なのである。当時、川内川河口の北側は高城郡で、河口南側と川内川の中上流域が薩摩郡であった。ゴンザたちが出航したと思われる港、京泊自体は高城郡に位置するが、面積は高城郡より薩摩郡の方がかなり広く、当時の繁栄状態から判断しても、ゴンザの住居が薩摩郡にあった可能性は高いと思われる。そのように想像を逞しくすると、ゴンザからの回答をもとにアンドレイ・ボグダーノフが記録した『города Сацмы』とは、「薩摩国」のことではなく、「薩摩郡」のことであった可能性も出てくる。年少のゴンザが、ボグダーノフから出身地を尋ねられたとき、広い見地には立たず、身近な地元名を答えたということは考えられるのではあるまいか。

ここで、もう一点、思い出されることがある。前述の『簡単な報告』の中に登場する、日本の地名に関する江口泰生(2006)の指摘である。『簡単な報告』には、「日本国家には都の他、66の都会があり、それは大体次のように呼ばれる」とあり、「штакава(白川)」、「нара(奈良)」など31の地名が挙げられているが、漢字ではなく、ロシア文字で記されているため、地点の同定が困難なものがいくつかある。その一つに「чуго(チュゴ)」という地名があるが、この地名に関して、江口泰生(2006)は、長音短呼という当時の薩隅方言の特徴も考慮に入れながら、「薩摩郡川内市中郷」ではないかとしている。挙げられている他の地名が「日向」「豊後」など藩名であるのに対して、局地的すぎるのが難点であるが、他にも「平戸」「松島」など藩名以外の地名が挙げられているのも確かである。そして、他と比べてやや異質な点について、江口

はむしろ、「この「中郷」は極めて局所的であり、注目される」とし、だからこそ「(ゴンザの) 出身地の可能性もあると思う」と推測する。これもゴンザの年齢を考えれば、あり得る推測である。「中郷」とは、川内川中下流域にあり、近世期には、薩摩郡に属していた地域である。

6. 結びにかえて

以上、ゴンザが残した語彙や、当時の情勢、『カムチャトカ地誌』の記述から、ゴンザの出身地を探ってみた。本稿では、一応、現在の薩摩川内市の辺りではなかったかという結論に至ったが、あくまでも状況証拠に頼ったものであり、冒頭に述べたように、決定的な証拠を提示することが不可能である状況に変わりはない。しかし、ここで敢えて大胆に推定を行ったのは、一つの可能性として、議論の材料になればと考えたからである。今後とも、語彙分野をはじめとして、多方面からの推察を行いたい。諸賢のご批評を乞う。

注

- 1) 村山七郎 (1965) の 22 頁参照。村山によって、この『カムチャトカ地誌』の当該記事は、ゴンザの監督者アンドレイ・ボグダーノフの書いたものであることが明らかにされている。
- 2) 村山七郎 (1965) の 211~212 頁参照。『レクシコン』は、1782 年にロシア科学アカデミーに提出された、ロシア語と日本語の対訳資料。著者は、日本からの漂流民サノスケ (ロシア名: イワン・タタリーノフ) の息子、アンドレイ・タタリーノフである。
- 3) ゴンザファンクラブが中心となって、1999 年 12 月から 2000 年 3 月にかけて実施。ゴンザ資料に記されている語のうち、300 語を選出し、各地での現存状況を調査。県下 75 地域からの回答を得ている。調査結果は、『ゴンザの鹿児島方言の語彙調査の報告』(2000) で報告されている。
- 4) 「KIBISU」は、九州では珍しい表現であるため、全国で広く用いられている「かかと」のことを指す「KIBISU」との混同による、偶然の出現の可能性も疑われかねないが、東日本



にまで視野を広げてみると、実は、茨城、福島辺りにも分布していることがわかる。このため、この語形は、単なる偶然の出現ではなく、歴とした方言形として存在していたと考えられる。

- 5) 本稿に登場する地名については上の地図を参照のこと。
- 6) 文頭の「南瓜」には、振り仮名がないが、直後の頁には、「ぼうぶら」の振り仮名が見られる。
- 7) 『和漢三才図会 卷第百』を見ると、「ぼうぶら」「かぼちゃ」はそれぞれ「南瓜」と「南京瓜」として立項されており、もともとは別の作物であったという見方もできる。
- 8) 当時においても [h] 音を表したであろうと思われるロシア語の「x」という文字は、現に、ゴンザ資料では用いられていない。18世紀前期薩隅方言の音韻体系には [h] 音としてのハ行子音は存在していなかったことがわかる。
- 9) 村山七郎 (1965) 26～28 頁参照。
- 10) 大坂への交通手段としては、他にも、陸路と海路を併用する方法もあった。幹線街道の出水筋、大口筋を利用して、豊前小倉まで出たあと、そこから海路を取る方法と、高岡筋を利用して日向細島に出て、そこから海路を取る方法である。しかし、『簡単な報告』によると、ゴンザの乗った船は、米以外にも、文書、紙、布、絹織物、紫檀を積んでいたということである。

あり、その量も17人の乗組員が半年以上も漂流して生存を可能にしたほどなので、かなりのものであったと推測される。そのように考えると、途中まで陸路を使うという手段をとったとは考えにくく、薩摩国内の港から、直接、出航したと考えるのが妥当であろう。『鹿児島県史第二巻』553～556頁参照。

- 11) クラシェニンニコフの記述は、「фаянкмар」であったが、アンドレイ・ボグダーノフの原稿より、実は「фаяикъмар」であったことが村山（1965）によって明らかにされた。
- 12) 『川内市史 上巻』902～905頁参照。
- 13) 『川内市史 上巻』833頁参照。なお、この記録は『漂流紀聞』として玉里文庫に収められている。
- 14) 村山七郎（1965）26頁参照
- 15) 元禄四年『日本海山潮陸圖』（人文社）参照。

引用文献

- 江口泰生（2006）『ロシア資料による日本語研究』和泉書院
- 沢木幹栄（1979）「物とことば」（『日本の方言地図』徳川宗賢 1979 中央公論社）
- 清水桂一（1980）『たべもの語源辞典』東京堂出版
- 田尻英三（1987）「九州弁の言語史料」（『国文学 解釈と鑑賞』）
- 村山七郎（1965）『漂流民の言語』吉川弘文館
- 村山七郎（1985）『新スラヴ・日本語辞典 日本版』協力者井桁貞義・興水則子 ナウカ
- 『鹿児島県史 第二巻』鹿児島県 1940
- 『旧記雑録追録 卷三十五』鹿児島県維新史料編さん所編 1972
- 『川内市史 上巻』川内郷土史編さん委員会編 1974
- 『草木六部耕種法 卷十七』佐藤信淵著 1833（『日本経済大典』第19巻 啓明社 1929所収）
- 『日本言語地図』国立国語研究所 1966-1974
- 『日本後紀 卷十二』国史大系 吉川弘文館 1966
- 『大和本草 卷之五』貝原益軒 1709（『益軒全集卷之六』益軒会編纂 1911所収）
- 『和漢三才図会 卷第百』寺島良安 1712（『和漢三才図会 18』島田勇雄 竹島淳夫 樋口元巳 平凡社 1991所収）